

学力向上忙しい学校

ここにいるよ

沖縄子どもの貧困

第3部 学習支援(7)

⑧

「忙しいよ」なのかな、どんな家庭なのか。言葉がほとんど分からないまま接していた。本島中部の40代の男性教師は、6年の担任で勤めた1年前の学級運営を振り返る。

この学校は昨年度、4月の家庭訪問を7月の夏休み期間に移した。管理職は「4月は前年度までの学級の定着を図ることを優先する」と説明したが、実際は全開学力テスト直前対策が目的の目標変更だった。

4月から7月までの間、担任教師は家庭の様子や言葉を把握できないまま授業を進めることになった。例年と比べて子どもたちの流れが目立ち「学級崩壊」が起こった学年もある。低学年の学級では保護者家庭の児童が随行動を起すことが、教師員が

誰も家庭のことを知らず対応に苦慮する事例もあった。計算が大きいため、2016年度は家庭訪問を4月に戻した。

教師は「子どもの様子や行動の背景に何かあるのを知っておくことは、絶対必要だと意識した」と振り返る。「学校現場は常に忙しい、優先する必要があるが重要。学力向上が最優先の現状に対し、貧困対策も同じくらい大事だ」という視点を持つ必要があると話す。

本島中部の小学校では1、3月、算数が苦手な子どもは低学年教員が対策に放課後や休日の補習をした。高学年の中には

学習環境を整えば現場は負担減



補習で高学年の児童に勉強を教える小学校教師一本島中部

増えていることを懸念する。保護者が家庭学習に関われる家庭と、それができない家庭との差を拡大させる原因になっている」と指摘する。

「年々、子どもの二極化が進んでいる」とも感じている。「勉強もスポーツも得意で何となくも意欲的に取り組む子と、全部苦手で何に対しても意欲を持っていない子の両極端が目立つようになった」と実感を込める。

学習塾やスポーツクラブの活動に親子で積極的に参加する子がいる一方、金銭的理由や保護者の不参加などで何の活動もできず、放課後、街をふらついている子もいる。サッカークラブで頑張っていた子が遠征費を払えないことで退部し、意欲を失って非行に走った例もあった。

教師は「子どもの貧困対策を現場は負担増と捉えがちだが、学校が本気で取り組めば教師の負担軽減につながる。子どもが学習に向かう環境を整えば、本来の仕事の授業に集中できる」と強調する。(子どもの貧困)取材班・田嶋正博

部市内内の小学校に勤務するベテラン男性教師は宿題の量が増加傾向にあり、家庭の負担が

＝火＝木＝曜＝日＝曜＝